

佐藤茂広・小川政弘作 「恋心」

効果音 (ガヤ)

矢沢浩子 健君、返事が聞きたいんだけどな。ねえ、わたしのこと嫌い？

小川健 え？ いや、そんなことはないよ。

浩子 じゃ、好きなの？

健 うーん…。

浩子 今、「うん」て言ったの？ ねえ、どっちなの？

ナレーション 小川健は高校2年生。バレー部のエースアタッカーである彼は、なかなか人気がありました。その彼に、勇敢に迫っているのは矢沢浩子。健と同じクラスで、クラブも健と同じ女子バレー部の浩子は、なんとか健の心をつかもうと、華麗なるアタックを試みているのです。昨日もこんなことがありました――。

効果音 (街の雑踏)

健 おれに用ってなんだい？

浩子 あのねえ…。

健 なんだよ？

浩子 あのねえ、わたし、小川君のこと、好きなの。

健 え？

浩子 好きなの、小川君が。お付き合いしてくれる？

健 うーん。少し、考えさせてくれないか？

浩子 ダメなのね。分かったわ。

健 そうじゃないって。まあ、あんまり突然だったから…。

浩子 じゃあ、なるべく早く答えを聞かせてね。

健 うん。

浩子 途中まで一緒に帰らない？ 小川君て、ずっと東京？

健 ううん。小学校までは大阪にいたんだけど、おやじの転勤があつてこっちに引っ越してきたんだ。

浩子 わたしはずっと東京。お父さんもお母さんも東京の人だから、田舎がないの。小川君のこと、もっと聞かせて。

健 うん。…おれ、クリスチャンなんだ。神様のこと、信じてる。

浩子 クリスチャンて、キリスト教でしょう？ 天高くそびえたつ真っ白な壁、中はひっそりとしていて、空気は少し冷たい。そして美しいステンドグラス。その中に静かに座って祈っている人がいて…。すっごくロマンチックだねえ。

健 おいおいおい。それは少しイメージが下げすぎるよ。クリスチャンと言うのは、聖書に書かれてある神様を信じている人のこと。クリスチャンがみんなで礼拝する場所が教会だからさ。“天高くそびえたつ”なくてもいいし。そうだ、そんなことよりも、今度の日曜日、教会に来てみない？

浩子 うーんと、17日かなあ。バレーの試合があるからちょっとダメだけど、その次なら空いてる！

ナレーション それから数日後、健は、まだ浩子に返事をしていません。今日はもう不安を隠しきれなくな

っています。

効果音

(教室のガヤ)

健

おれさ、浩子のこと、嫌いじゃないんだ。

浩子

やっぱし、好き？

健

うーん。前からかわいいと思ってたし、優しくてよく気がつく人だと思ってた。

浩子

ほ、ほんと？ ほんとなの？ 今のが返事って思っているのね？ わたし、わたし！

健

ちょ、ちょっと待ってくれよ。

浩子

うん、いいわよ。一緒に帰りましょう！ わたし校門のところで待ってるから。それじゃまたね！

ナレーション

浩子は喜びを隠しきれずに、小走りで、校門のほうへと向かっていきました。それに引き換え、健は、テスト直前のように浮かない顔をしています。

健(モノローグ)

あーあ、あんなうれしそうな顔して走っていったら。困ったなあ。どうすりゃいいんだろう？ 今更、「僕は決まった人がいます」なんて言えないなあ。

ナレーション

そうです、健には、水沢敬子という、中学時代から付き合っている人がいたのです。同じ教会に行っている敬子とは、“いずれ結婚を”と思っているくらいなのです。健が悩んでいるのももっともなことです。

浩子

健君。わたしやっぱり、今度の日曜に、教会 行ってみるわ。

健

バレーの試合は？

浩子

レギュラーになれなかったからいいの。それに小川君のこと、もっと知りたいもん。ねえ、一緒に行ってくれるでしょう？

健

もちろん。朝の 10 時半から礼拝が始まるから、そうだな、10 時に駅で待ってるよ。そうすればいいだろ？

浩子

うん。でも、どんなことするのか、教会って？ わたしは何も要らないんでしょう？

健

うん。初めてだからね。でも心配することないって。怖いところに行くわけじゃないんだから。

効果音

(駅の雑踏)

浩子

ごめんなさい。待った？

健

ううん。僕も今来たところだよ。浩子って、私服着るとすごく大人っぽく見えるんだね。

浩子

え、そうかな。小川君と一緒にいけると思って、ちょっぴりオシャレしちゃった。

健

さ、急ごう。礼拝に送れちゃうよ。

教会員

(口々に)おはようございます。

健

おはよう。

浩子

あ、おはよう… ございます。

教会受付

おはようございます。よくいらっしやいました。小川君、その人 初めて？

健

うん。この人はね、僕のクラスの友達で…。

水島敬子

(さえぎって)あ、健くん。ちょっと。

健

なんだい、敬子。

敬子

あの人、だれ？

健

ああ、あの人？ 僕のクラスの友達で、矢沢浩子さん。一度僕の行ってる教会に行ってみたいと言うんで、待ち合わせて一緒に来たんだよ。

敬子

ああそう。だけど健くん、女の人連れてきたの、初めてね。

健 ん？ うーん、そうだったかなあ。

敬子 今朝、教会に来る時、見たのよ、二人。あなたに声かけようと思ったら、あの人がやってきて、とても親しそうだったわ。あの、健くんと手を組んでた。どうして？ どうして早く言ってくれなかったの？ ひどいわ！（足早に去る）

健 待てよ 敬子、違うんだ。敬子！

浩子 小川君、どうしたの、今の人？

健 え？ い、いや、なんでもないんだ。

司会者 それでは、本日の聖書の箇所を読んでいただきます。ルカによる福音書の 6 章の 20 節から。

聖書朗読者 「イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話されました。」(FO)

ナレーション 健の心は、重く押しつぶされそうになっていました。いつも明るい彼も、こんなに苦しい思いをしたのは初めてでした。

健(モノローグ) 僕は一体、どうすればいいんだろう？ 敬子の心を傷つけてしまった。それに浩子にも、ほんとのことをまだ言ってない。一体どうすれば…？

聖書朗読者 「貧しい者は幸いです。神の国はあなた方のものですから。今飢えている者は幸いです。あなた方はやがて飽くことができますから。今泣いている者は幸いです。あなた方は今に笑うようになりますから。」

健(モノローグ) なんでこんなことになっちゃったんだろうかなあ。こんなこと、考えてもみなかった。…いや、そうじゃない。心の中では、あるいはこうなっちゃうのが分かってたんだ。でもその時はその時、なんとかかなると思ってた。でも敬子があんなに怒るなんて、夢にも思っていなかったんだ。

聖書朗読者 「しかし、今聴いているあなた方に、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。」

健(モノローグ) 浩子が教会に来てくれると言った時、正直うれしかった。「ああ、彼女にもイエス様のことを知ってもらえる」と思ったんだ。それはウソじゃない。でもどこかが違ってたんだ。

聖書朗読者 「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。自分を愛する者を愛したからといって、あなた方になんの良いところがあるでしょう。罪びとたちでさえ、自分を愛する者を愛しています。自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなた方になんの良いところがあるでしょう。罪びとたちでさえ、同じことをしています。」

健(モノローグ) 「罪びとたちでさえ、同じことをしています。」「自分を愛する者を愛しています。」… 一番悪いのは、僕が浩子に対していい加減な態度をとったことだ。軽い気持ちで「好きだ」なんてことを言って、誤解を与えたまま本当のことを言えなかった。でもどうして言えなかったんだろう？ 浩子には「好きだ」と言われて、悪い気はしないで、そのまま受け入れてしまったからだ。僕はいつも女の子たちにはチャホヤされてきた。いつの間にかそれに慣らされてしまって、浩子のことを心のどこかではそんな風に考えてたんだ。いい加減で、自己中心で、相手のことをちっとも考えていない。だから「敬子も話せば分かるだろう」ぐらいに考えてる。なんて甘たれてるんだろう。その結果がこれだよ。——神様、<sup>ゆる</sup>赦してください。助けてください。どうすればいいんですか?!

聖書朗読者 「裁いてはいけません。そうすれば自分も裁かれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば自分も赦されます。」

音楽 (エンドBGM)

健(モノローグ) 敬子、ごめん。僕の本当の気持ち、手紙に書きます。浩子、ごめん。礼拝終わったら、話そう、はっきり。悲しむだろうなあ。いや、怒られるだろう。でも、今言わなきゃダメなんだ。神様。どうか、勇気を与えてください。そして僕を、こんな僕をほんとに赦してください。

ナレーション 健は、今初めて、十字架の主の前に立ったような気がしました。そして、イエス様のみ手の中で、自分が新しく作り変えられていくのを、静かに待ち望んでいたのです——。

<完>